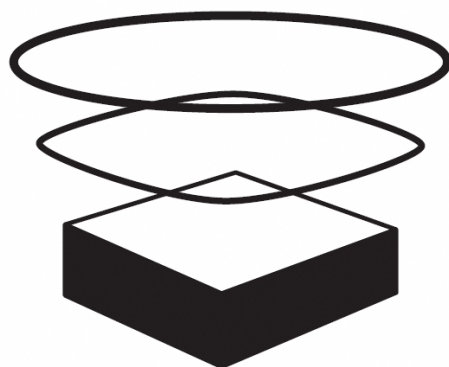


芸術文化施設のあり方に関する提言



平成24年7月

前橋市芸術文化施設運営検討委員会

目次

委員長メッセージ	1
委員会について	2
提言要旨	3
1) 推進する「芸術文化」とは多様で質の高い芸術文化である	4
2) 運営組織と市民参加	7
3) 収蔵作品	9
4) 地域貢献	10
5) 情報共有	11
6) 地域連携	12
7) 館名（ネーミング）について	13
後記	14
20年後の前橋市民と芸術文化施設	15
資 料 編	23

委員長メッセージ

平成21年に発足した「美術館基本構想検討委員会」から提出された基本構想をうけ、平成22年「美術館基本計画検討委員会」が作成した基本計画の高い見識に敬意をはらい、平成24年、前橋市民は「芸術文化施設運営検討委員会」を設置、「**次世代のためになにを手に入れられるのか**」の検討を行った。

20年後、前橋市民が先人の英知に高い評価を下しているであろうことを願いつつ、この提言を行うものである。

運営検討委員長 中島 信之

委員会について

芸術文化施設運営検討委員会の設置が決定した4月、すでに建築物は発注契約、着工されており、設計の変更が困難であることを前提として、その運営の検討を諮問された。

まず、白紙（ゼロベース）の状態で開催検討の議論を行った結果、既出の「基本構想」「基本計画」を基本とすることで意見の合意がなされ、全4回の運営検討委員会を開催した。また、委員に対してアンケート等を実施、効率的な意見集約をおこない、さらに公聴会（タウンミーティング）を開催、より多くの声を提言書に反映することに努めた。

提言要旨

- 1、この施設が推進する芸術文化について検討した結果、「多様で質の高い文化」を推し進めること。
- 2、前橋市民が、経営管理、企画運営、評価、推進のいずれの分野にも主体的に関わりを持てるようなシステムの構築を目指すこと。
- 3、施設開館までの期間、市民に対して周知を図るため、市民集会、公聴会、イベント等を開催、市民参加を促すために継続的な文化推進会議の設置を提案すること。
- 4、継続的に優れた作品を収集して、前橋の文化を体系的なものとして整備していくこと。
- 5、教育機関等と連携し、次世代の芸術文化を担う若者の育成を行うこと。
- 6、新しいメディアを駆使し、地域間、世代間の情報格差の是正に努めること。
- 7、この施設が牽引役となり近隣の公共・民間施設と連携しソーシャルワークを創出すること。

1) 推進する「芸術文化」とは多様で質の高い芸術文化である

□なぜ多様で質の高い芸術文化なのか

前橋に新しくできる芸術文化施設は、当初、美術館であることを想定してスタートした。今回、再考するにあたり、私たちは、前橋の地にふさわしく、また現在工事中のこの建物の魅力が、より増すような考え方がなんであるかを検討した。そして、この場所を「多様で質の高い芸術文化」の生まれる場所にしたいと考えるにいたった。

なぜなら前橋は、これまでも、多くの芸術家や文化人を輩出する文化度の高い地域だからである。また、美術自体がいまや美術単体というジャンルの枠や表現といった活動を超え、人の在り方そのものに直結する「アート」の世界へと飛躍しているからだ。

これまでの前橋市美術館構想や基本計画を紐解き、そこに書かれ、そこから生まれようとしたものを私たちがほんの少し、大きく育て上げたとしたら、それは「多様で質の高い芸術文化」なのではないかと思うにいたった。

- * 多様とは、ジャンルが多様であること
- * 多様とは、参加形態が多様であること
- * 多様とは、コラボレーションによって新たなものが生まれること

私たちの言う「多様」とは、「なんでもあり」ということでない。たとえば、現在工事中の建物は、デパートをリノベーションして、美術館にする予定であり、博物館法にのっとった美術館としての機能はクリアしている。しかし、美術にとって、必ずしもすべてが行き届いた建物にはなっていない。かたや音楽やダンスや演劇にとっても、決して十分な空間であるともいえないのである。

しかし、だからこそ、今、あの場所から生まれようとしている、新たな芸術や新たな文化があるのではないか。私たちは、そんな可能性を感じた。

□あの空間はなにかが足りないのではなく、そこでなにができるか、私たちに「挑戦している」空間なのだ。

全面ガラス張りのロビー、徐々に芸術空間へと誘うアートプロムナード、外界との一体感を感じさせる吹き抜け、ホワイトキューブとも呼べるプレーンな空間を生かしたギャラリー。美術作品や写真や書が襟を正して展示されることもあれば、既成概念

を大きくはずした大胆な展示が実現することもあるだろう。インスタレーションやアートプロジェクトが展開することになれば、映像とダンスと邦楽のコラボレーションによって、新たな芸術が生まれることもある。必要に応じて、平台を組んだり、ホワイトキューブに黒い幕を張ったり、照明が使えるたりできれば、空間を活かす可能性はもっと広がる。

その時、「なんでもありで、なんでもない」を回避するには、「質の高さ」が求められる。

□質の高さとは「セレクト」されていること

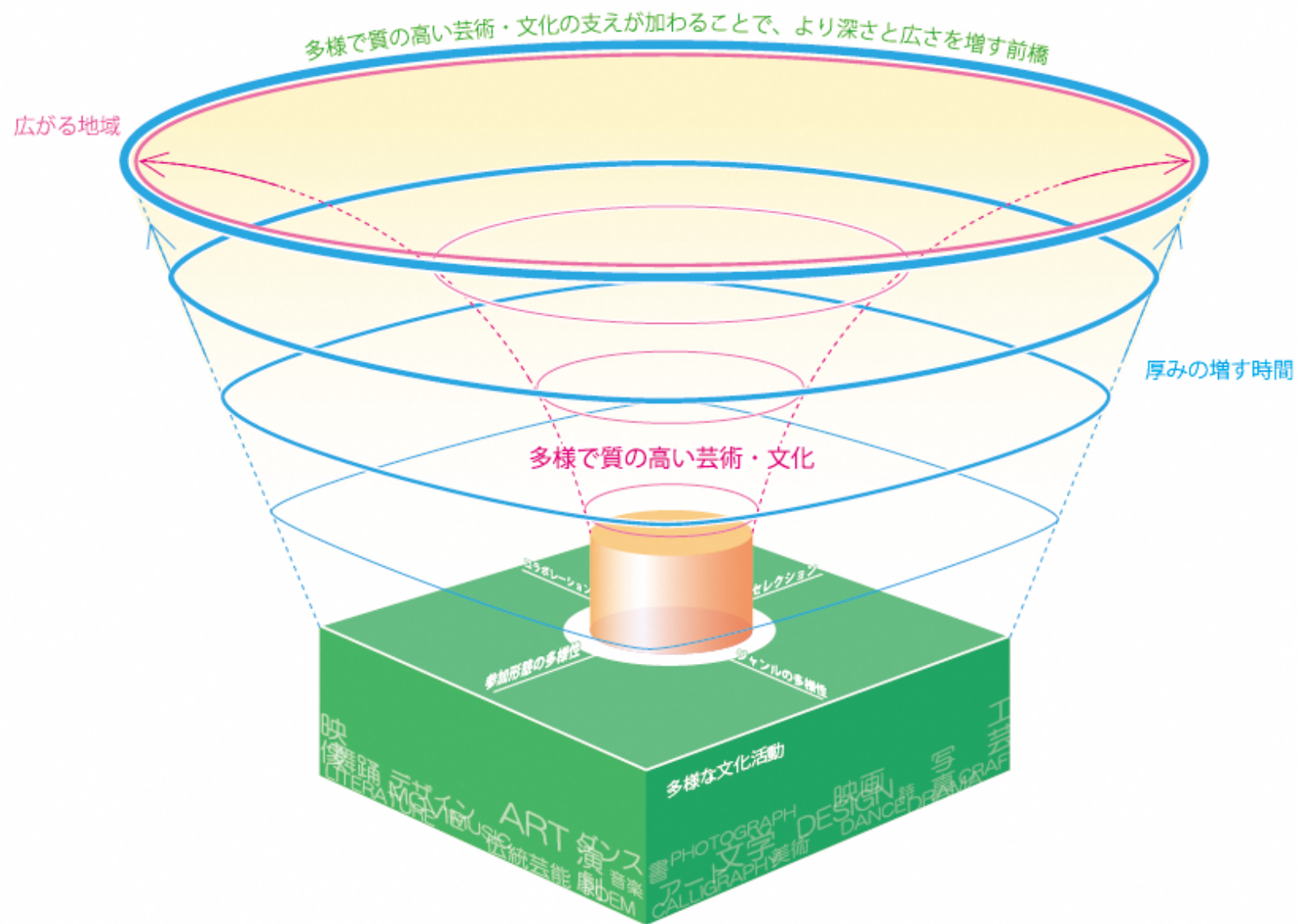
私たちがここで言う質の高さとは、たとえば、選ばれたもの、セレクトされたもの、と言えるかもしれない。国内外で高い評価を受けた作品はもちろん、この施設が独自に設ける基準があり、その基準をクリアした世界観こそが、この施設で展開できるということである。その基準は、開館当初は館長や学芸員といった専門家が担うことになるだろうが、そこには必ず「前橋市民」が長年培ってきた前橋の審美眼も活かされなくてはならない。そして、その基準が妥当なものであるかどうかは、第三者の組織によって常に検証されなければならない。そこから、若手の作家が発掘され、大きく世界へと羽ばたくことを私たちは期待してやまない。

また、老若男女問わず、この基準をクリアする質の高い芸術、文化を目指す人々に対しては、学びの場を、質の高い芸術や文化にふれたい人々にとっては、気軽なワークショップの開催などが望ましいが、「質の高さ」にこだわった場であってほしいと考えている。「いつでも行けるけど、特別な場所」であってほしいのだ。

そして、前橋のこの場所から、質の高い作品や作家を生み出すためには、「前橋市民」がより一層、審美眼を磨く必要がある。質の高さとはなんなのか、質の高いものを生み出すためにはどんなことが必要なのか、質の高い作品とどのようにつきあえばいいのか。この場所で、そのようなアトリテラシーを身に付け、高める機会も必要だ。もちろん、未来の作家候補、一流の目利き候補である子どもたちに対しては、もっとも力をいれていかなければならないだろう。

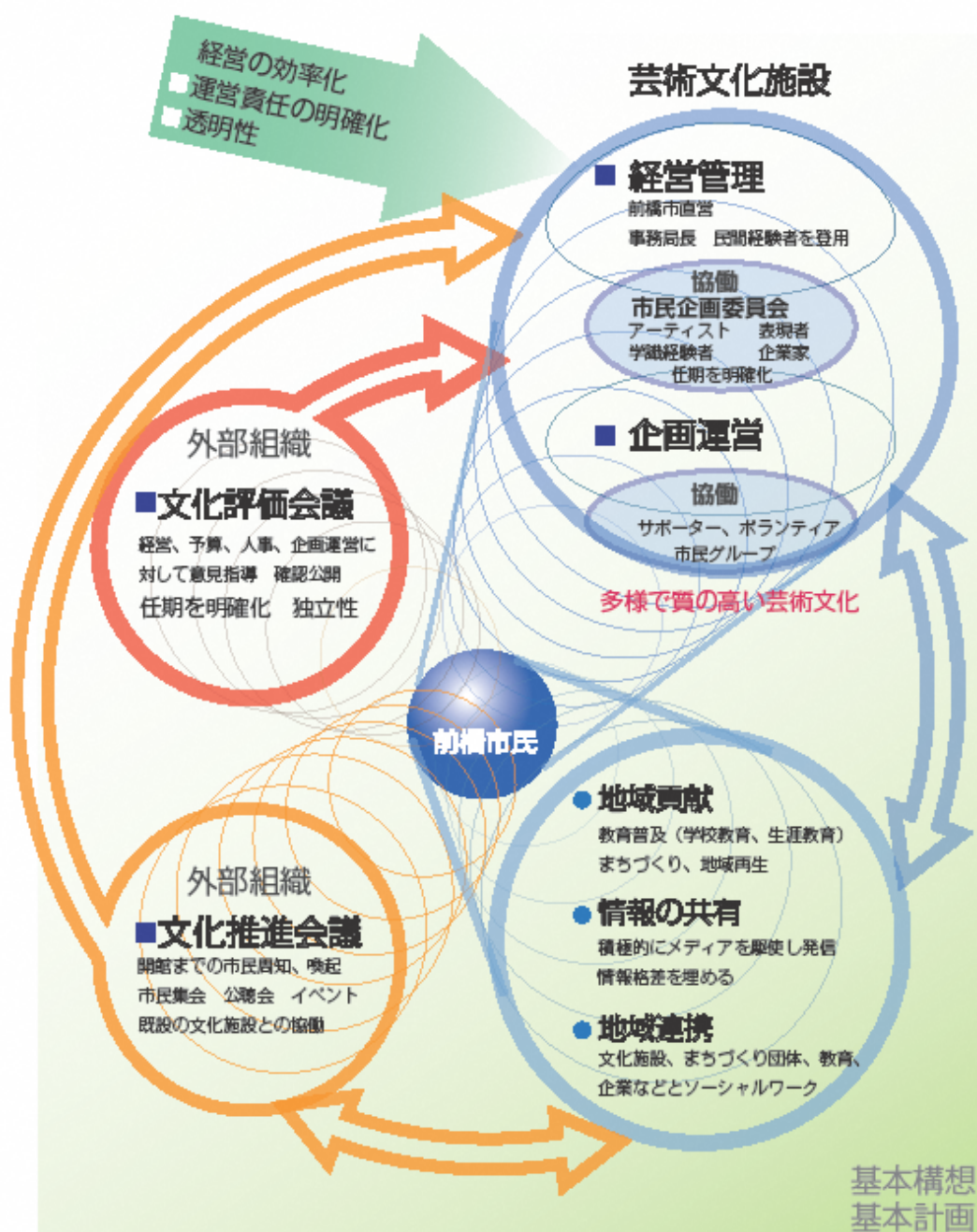
□多様で質の高い芸術・文化は後世への贈り物

かつて生まれた前橋ゆかりの美術作品の収蔵・研究・普及につとめ、あわせて現代の多様で質の高い芸術文化を展開する中で、この施設は、前橋のもつ地域の豊かさを内外に発信するとともに、前橋の文化を後世に残していく役割を果たすこととなるだろう。



2) 運営組織と市民参加

運営組織と市民参加概念図



芸術文化施設運営検討委員会

□経営管理

経営の形態は当面「直営」であるべきと考える。公共施設の経営には「直営」か「指定管理」のいずれかになるが、開館後いきなり「指定管理」になることは難しいと考える。まずは「直営」としてスタートを切り、市民参加組織と協働できるような体制がのぞましいと考える。

館長は見識の高い人物が望ましく、サポート役として行政や経営に通じ、民間の柔軟な感覚を併せ持つ人材を登用し、市民参加組織との協働を図るべきである。

□企画運営【内部市民組織】

市民参加の方法として、この施設で展示を観たり、自分の作品を展示したりする「利用」という参加の仕方や、この施設の「運営」にも参画するという、さまざまな関わり方が考えられる。これまでのように、あらかじめ用意された枠組みのなかで手伝いをするというような受身のスタイルだけではなく、より積極的で継続的な関わりを持ち、専門家と協働して施設の運営に参加することが必要である。

具体的にはアーティスト、作家、学識経験者、企業家等で構成する市民企画委員会が経営管理、企画運営においても協働し、自主企画ができるような体制が望ましい。なお、この市民組織には、大きな責任が課せられるため、定員と任期を設け、連続の選出を行わないこととしたい。

さらに養成講座などを設けて、サポーターやボランティア、市民グループの育成を図る必要もある。

□評価【外部組織】

市民組織の一つとして、有識者で構成する文化評価会議が必要であると考えた。経営、予算、人事、企画運営に対して意見指導できる権限を持ち、適切な経営や運営がおこなわれているかを確認、公開することで、市民の理解と支持を得られやすくなると考える。任期や独立性を持たせることなどで形骸化を防ぐ仕組みも必要である。

□推進【外部組織】

「運営検討委員会」は限られた日程の中で検討を行ったものであり、運営の骨格を概略的に示せるところまでは到達したものの、さらなる深化、具体化を図るために、開館までの任期で「文化推進会議」を設置、継続的な運営検討と市民集会、討論会等で市民周知のための広報活動などの支援を行うことが必要と考える。

3) 収蔵作品

□作品収集と公開

収蔵作品については、すでに収蔵している作品の管理、及び調査・研究を継続的におこなうことにより、コレクションの体系化を行なうべきと考える。「前橋市における美術館基本計画」の「第3章 事業活動計画 3. 新たな文化の創造 (4) 収集・保存」に記載されているように、「①地域ゆかりの作家の作品を中心にした収集 ②美術館の諸活動に関連した作品の収集 ③アートの創造力によって地域に貢献できる作品の収集」に準じ、継続的に優れた作品を収集して、前橋の文化を体系的なものとして整備していくことも重要である。同時に、若手アーティストを育成して、前橋市が作品収集していくことも、この施設の活動としては必要だと考える。

また、これらの収蔵作品はより市民にオープンな形で公開すべきである。作品を展覧会などで紹介し、体系的なコレクションに育てることで「価値付けていく」という機能もある。そうした作品を積極的に公開していけるように、今後、学芸員を中心に方法を検討願いたい。加えて、展示事業に限らず、いつ来ても見られる作品も検討して欲しい。前橋の地域性や施設の空間的な特徴を活かし、体感できるような作品があることで、来場者が常に作品を楽しめる。

これらの諸活動は、前橋の文化を後世に伝えていく役割があり、結果として本委員会の設置目的の一つである、次世代への投資という、前橋の子どもたちに対する教育普及活動の充実のためにも重要な役割を担うものとなると私たちは考える。

□収蔵庫

収集した作品は前橋で営まれた文化の束のひとつである。収蔵作品は前橋にとって重要な文化財産でもあり、これらを次世代に残していくためには保管設備が必要である。本施設に設置される収蔵庫は、単なる倉庫や保管庫ではなく、美術作品などを一定の環境で保管できる機能を有している。収蔵庫は市民の文化財産である収蔵作品を保存・管理するために活用すべきである。

前橋に収集の意思と保管する機能がなければ、前橋で営まれる文化活動は一過性のものとなるか、他者によって価値づけられるのを待つしかない。しかし、意思と機能を備えることで、前橋で営まれた文化活動を自らの手で価値づけることができるようになるだろう。収蔵庫は、前橋の芸術文化の価値を、後世につないでいくために必要な設備である。

4) 地域貢献

子どもの頃から多様で質の高い芸術文化に親しむことで、将来的に前橋の芸術文化を担う人材が増えていくと考えられる。そのために、この施設と教育機関との連携を図り、次のような事業を行うことを提案する。

- ☐市内の小中学生が当施設に来館する事業
- ☐収蔵作品に関する教育プログラム
- ☐学芸員やアーティストが学校に赴く出張授業
- ☐幼児期から創作の楽しさや感性を育む事業

上述のような、当施設をより身近に感じてもらえる工夫が必要である。学習指導要領等でも、地域の文化施設を活用することが勧められており、「教育普及担当者」を設けて教育機関と連携を図ることが重要である。また、ものづくりの考え方を学習するために、近隣商店街の店舗などを利用しながら、子どもたちを対象としたワークショップを開催するなど、次世代への文化の継承と前橋の芸術文化を担う若者の育成に向けた活動が望まれる。

また、高齢化という社会状況にも、生涯学習という観点からこの施設の役割は大きいと考える。しかし、学習に留まらず、「参加」といったかたちの能動的なプログラムの提供で高齢者自らの積極参加が促され、地域貢献に繋がるものとする。

5) 情報共有

前橋発の芸術文化の創出、という社会的使命を果たすためには、近隣の組織や地域内において、緊密な情報共有が必要不可欠である。

情報共有の具体的なアイデアについては、さまざまな角度から考えることが可能であるが、積極的に新しいメディアを使いながら、地方のこれからの情報共有の在り方をこの施設を中心として展開していかなければならない。twitter、facebook といった新しい外部からの情報ツールはもちろんのこと、アナログの原点「クチコミ」、「紙媒体」を使った「市民一人一人が1メディア」という内部からわき上がるメディアで、この施設が市民の共同体感覚の確立を先導し、地域間、世代間における情報格差を、あらゆる手段によって埋めていく必要性が求められる。

この施設は、単なる地域芸術・地域文化の拠点ではなく、各地方都市における共通の問題でもある「東京一極型からの脱却」、あるいは、次世代に向けた地域情報の共有・発信の在り方を、新しいモデルケースとして、前橋市民の手でつくりだすことが求められている。

6) 地域連携

豊かな自然とゆったりした町並みに恵まれた前橋で、質の高い芸術文化に触れられるこの施設ができることは、地域が活性化するための第一歩となる。また、”前橋方式”と呼称されるような新しい芸術文化や施設を創り出す姿勢が求められ、そのためにもこの施設が牽引役となり、近隣の公共・民間施設と相互に協力すべきである。特に隣接の「前橋プラザ元気 21」、同じ建物内の映画館や同じ博物館類似施設の「前橋文学館」あるいは、まちづくり、教育などのグループ、団体と連携して、地域に暮らす多くの人々が関わり合うソーシャルワークを積極的に創りだしていくべきである。こうした様々な連携と独自の取り組みを通して、芸術文化に関心がなかった市民にも周知・理解を深めることが重要である。

さらに、市内のみならず、市外・県外からの来館者が数多く訪れ、隣接地域の芸術文化とも連携できるような活動が求められる。まちづくりや地域再生の手段として、産業や企業とも連携する必要がある。市内（或いは県内）の伝統工芸品や特筆すべき商品を製作する企業や職人と協力し、相互にメリットがある地域連携を模索することが重要である。

7) 館名（ネーミング）について

アーツ前橋 : Arts Maebashi

芸術文化施設運営検討委員会で館名（ネーミング）の検討を行った結果、下記のような選定理由となった。

多様で上質な芸術文化とは

ジャンルが多様であること
参加形態が多様であること
コラボレーションによって新たなものが生まれること

上記を包括し、理解しやすい単語としてアーツ【arts】がイメージされ、さらに地域名を冠する事が望ましいという意見から前橋【maebashi】との組合せに至った。

基本計画での「つながる」「成長する」「文化を創る」という理念もアーツ【arts】のシンプルな文字間からそのメッセージは伝わると考えられ、前橋【maebashi】をつけたことにより市民のアイデンティティを明確にすることが出来ると確信した。

以上のような同意からこの館名を提言することに至った。

後記

この提言を行うにあたり、要した時間とエネルギー、さらに委員全員の次世代への熱い思いが凝縮されていることを全市民にお伝えしたい。

今後、提言内容がいかに関現化されていくのかを注視し、前橋市の20年後に思いを馳せ、13人の高い見識と善意に感謝しつつ、この委員会を終わりたい。

運営検討委員長 中島 信之

20年後の前橋市民と芸術文化施設

～前橋市民が、この施設とどう関わっているかの未来予想～

【岡田委員】

事例：Dさん（70代、男性）：20年前は会社経営者

40年前、当時の私は某大手証券会社の営業マンで、連日のようにパーティーでお酒を煽り、一生懸命働いて、一生懸命遊ぶことで、幸せになれると当時の自分は信じて疑いませんでした。世に言うバブルを、主に社会人として過ごしてきた自分（他人？）の価値観を変えてくれたのが、10年くらい前に見た、芸術文化施設でのある展覧会だった。20年くらい前から独立し、経営学を日々学ぶなか、その頃にできた芸術文化施設の存在は、知ってはいましたけど、そんなに足を運ぶことはありませんでした。ただ、たまたまそのときの展覧会で見た作品は、これまでの自分を激しく揺さぶり、結果、いまの仕事に対する考え方を大きく変えることに繋がりました。それからは、年4回の企画展には、ほぼ毎回足を運んでいますし、見逃した展覧会については、インターネットや雑誌のレビュー等で必ずチェックしています。妻のほうも、今度の企画展のサポータースタッフに近所の友だちと応募して、刺激のある充実した毎日を送っているみたいですよ。

事例：Kさん（40代、男性）：20年前は大学生

20年前、地元でアーティスト活動をしていた僕は、当時の芸術文化施設のAIR（アーティスト・イン・レジデンス）プログラムで前橋で滞在制作をしていた韓国人アーティストと、ミニギャラリー千代田で偶然出会いました。気さくな彼は、全くアーティストとしての実績の無い自分に、いろいろと話しかけてくれ、言葉が全然通じ合わないながらも、彼のおかげで楽しい時間を過ごすことができました。その日から間もなく、突然思いもよらないことが起こりました。それは、彼が自分に共同で作品を制作してみないか？！といきなり提案を持ちかけてきたのです。思いもよらない提案に、最初自分は戸惑いましたが、思い切って一緒にやることにしました。その作品は、臨江閣で展示され、あれよあれよとその後韓国でも展示をし、自分も現地に行って楽しい時間を過ごしたりしました。20年たった今、お互いアーティストとして、ベネチアで再会することになるなんて！当時の自分は全く想像なんてしていませんでしたが、あのときミニギャラリーに行っていなかったら…いまごろ自分はどうしてたかな？

【金井委員】

今から20年前の話をしましょう。ここから物語が始まりました。

2012年、前橋市では新たな施設が完成しました。それは、前橋市の歴史の中では最初のアート専門の組織と施設で、前橋市民が長年待ち焦がれていたものでした。

しかし、高度成長、バブル崩壊、大震災・・・、経済の興廃と共に、この町も人通りのない商店街にシャッターばかりが目立ち、元気がなくなっていました。そうした時にこの芸術文化施設『ARTS・前橋』は誕生したのです。

市民たちは考えました。再び誇りの持てる町にしたい。元気で心豊かな町にしたい、と。豊かとは、モノの満足度よりもココロの満足度ではないか。心の満足感を膨らませていったら豊かな町が出来ると確信し、コツコツと自分たちと子孫のために活動を開始しました。その核としたのがこの『ARTS・前橋』だった。彼らはこの施設をそこに働く人たちに任せず、自ら立ち、施設の人たちと共に考え、計画し、運営し、反省する、全く新しい仕組みと活動を創り上げたのです。

◎この組織は、市民の培った“たから”を一つ一つ訪ね集め、市民が自由に見られるシステムをつくりました。

◎集めた前橋の“たから”を、楽しい企画で紹介していきました。

◎市民のアイデアを取り入れ、みんなが面白がって参加できる活動も行いました。

◎誰でもが創造的な活動や作品やアイデアを登録し、いつでも市民が閲覧、体感、活動出来る面白いシステムも作りました。大きいものから小さいものまで、質の高いものからそうでないものまで、何でも前橋の“たから”としてデータ保存するのです。

◎新しいことに挑戦する人を応援し、育てて行きました。

◎未来を担う子供たちの想像力と発想力が豊かに育つために、アートの教育現場として、アートを楽しむ活動を続けました。

◎思いも寄らないアートを紹介し、発想の転換する楽しさも教えてくれました。

こうして、『ARTS・前橋』は、芸術（アニメ、インスタレーション、映画、園芸、演劇、音楽、絵画、建築、工芸、化粧、写真、書、ダンス、彫刻、デザイン、パフォーマンス、ファッション、舞踏、漫画、料理等々）や教育、文化全て巻き込んだ活動の拠点として成長し、市民生活に変化をもたらしました。

2012年、それは人々が気軽にさまざまな才能に触れる生活の始まりでした。元気のなかった町も何時しか「前橋、最高！」と、何処に行っても誇れる町になっていったのです。街は『ARTS・前橋』を中心に人々が行き交い、楽しいお店も増え、シャッターだって開くことになったのです。「何か面白いことは？」、「今度は何やるの？」、「近所に楽しいことやる人がいるよ。」、「おいしいものは？」と『ARTS・前橋』に集う。気軽に楽しいことから巻き込まれて面白がっている。今となっては、『ARTS・前橋』の存在が私たちの生活の一部となっています。

【喜多村委員】

事例：50代男性

美術が好きなので美術館には普段から行っていた。前橋にできた芸術文化施設は、私が馴染んだそれとは違っていた。既存のジャンルでは括ることができない企画展示や公演が多いが、何度も足を運ぶうちに何となく分かるようになった。施設のカフェには、企画の感想を聞いてくるマスターがいる。展示を見た後、マスターと話しをするのが好きだ。たまに学芸員もやってきて会話に加わる。散会は閉館時間というのがお決まりのコース。開館当初、このような施設は表現者のためのものだと思っていたが、5年経った頃から、見る側がいないと表現は成立しないことが分かった。

2年に一度、学芸員と市民スタッフが共同で開催する展示がある。この市民スタッフ募集に応募し採用されたのは開館 10 周年記念の企画のときだった。様々な反応があり、そのひとつひとつに一喜一憂した。今までは自分も好きに感想を言っていたが、あの時の経験は私を少し変えたように思う。

私は今、定年を5年後に控える一つの決断をしようと思っている。来年で 20 年を迎える施設の経理担当者の募集が出ている。これに応募しようと思う。

【坂本委員】

事例：40代男性 20年前は大学生

学生時代、デザイナーを目指し美術系の大学に進んだ。前橋に新しい文化施設ができたというので足を運ぶと、商店街のなかでも関連した展覧会が開催されていた。そこで出会った学芸員の人や商店街の人の紹介で、まちづくり会社にデザイナーとして入社した。今では、商店や企業のパンフレットやグッズを作ったり、イベントの企画をするデザイナーとして活躍している。

【塩崎副委員長】

事例：Mさん（20代女性）：20年前は小学2年生

20年前、小学校2年生だった。たまたま応募した工作の作品が、オープンしたての芸術文化施設の小学生作品展で選ばれ、施設に展示された。その時から芸術文化に関心を持つようになり、企画展には家族で出かけるようになった。27歳になった今、幼稚園の先生をしている。子どもにとって、絵を描くことも砂場で遊ぶことも、リズム遊びやごっこ遊びも、みな、表現する楽しさという同じ思いで遊んでいる。前橋にこの施設があるおかげで、学芸員が幼稚園や保育所、小学校などに来てくれて、表現の楽しさや鑑賞のおもしろさを教えてくれている。幼い頃から子どもたちが芸術文化を身近に感じ楽しめることは、将来、前橋の芸術文化を支えていく子どもたちを育てることになると思い、ありがたいと思う。

【添川委員】

20年後の私は85歳。街をとぼとぼ歩いている。20年前に開館したアート前橋は、5年前別館に変わった。本館は広瀬川沿いに新築された。人口も税収も減少して、何よりも人々の意識、難しく言ったら価値観が変わった。多くの人が求めるものが物から心へ。美しさ楽しさ、やさしくされる嬉しさを大切にするようになった。別館となった古いアート前橋を、運営を担ってきた市民委員は時代の変化を掴み、先取りして居心地のよい場所にした。私は郷土の画家福田貂太郎作品が架けられた別館のカフェに座ってバロックの名曲を聴きながら熱いコーヒーを飲んでいる。ここはいつも来館者が多く、うるさくてかわない。

【中島委員長】

2032年、ニューヨークから凱旋帰国したアーティストのアートプロジェクトが多くの市民の参加のもと始まろうとしている。この施設から中心市街地へと繋がる大屋根構造の全天候型のイベント施設「ブリッジ22」周辺の大型バス駐車場は既に満車・・・このプロジェクトを仕掛けたアーティストは20年前この施設で初の個展を開いた前橋出身の・・・・・・だ。

【中台委員】

20年前、芸術文化施設の今後の運営方法についての提言を作成した私は、毎年行われる”アートフェスタ・Maebashi”を楽しみにしている。

プロダクトやアート、建築だけではなく、枠にとらわれない日本の文化を引き継ぐ自由な発想と様々なワークショップなどが提言、開催され、若手にとっては今後の登竜門、地域にとっては交流、教育プログラムへの転用なども促進され、ジャンルを超えた斬新なアイデアが発表、表彰される毎年恒例のイベントとして注目されている。

【中村委員】

今、僕の目の前から一機のロケットが飛び立つ。「Cocorozashi 1号」と名付けられたそのロケットには、僕の作品が搭載されている。三年前、国際航空宇宙センターが公募した「宇宙への贈り物コンペティション」に、生まれ育った前橋の芸術文化施設と合同で制作した作品で応募。パイオニア探査機の金属板、ボイジャーのゴールデンレコードに続き、宇宙に向けて地球を紹介する作品として選ばれたのだ。二つの金属に挟まれた空間に手でも足でも触覚でもかざすと、地球のイメージが浮かび、五感とともに、喜びや悲しみや我々人類が感じるありとあらゆる感情が立ち上がる。僕がもっとも強くこめた思いは「祈り」。僕がいなくなっても、僕の「アート」が宇宙を旅する。いつの日か、僕の祈りが宇宙の誰かに届く。

【西林委員】

一般的に、これまでの地方の公立美術館というと、学芸員が中心となって常設展、企画展を年間を通して開催。しかし入場者といえば、一握りの観客のみ。それでも施設側は平然としていた。

オープン前にあらゆる角度から話し合われた当施設は、とにかく市民の目線に立った施設、市民オール参加の、さらにそれがまちの活性化にも繋がるということでスタートした。そして、今、相応の目的、目標を達成していると思う。

ただ駐車場に難があり、年配者はあの螺旋式に二の足を踏む者多し。また常に満杯。周辺に駐車場ありといえども、そこから歩いてとなるとためらいがある。何百台でも自由における平地が必要であった。

【野本委員】

事例：Mさん 70代男性 20年前は会社員

まちなかの近くに住む私は、20年前から休日に広瀬川、馬場川などまちなかを散策するのは今も同じ。芸術文化施設ができて、企画展を観る楽しみに加え、施設を訪れる人のいろんな表情を見ることも楽しみになっている。この施設ができてから多くなった、明るい顔、かしこまった顔、うきうきした顔、よそ行きの顔、すがすがしい顔、誇らしい顔・・・。

【三友委員】

事例：(50代、女性)：20年前は30代

20年前、「アート」に興味や憧れはあったが、特別で手が届かないものだとも思っていた。ところが、この施設の運営検討委員を一般募集していることを知り思い切って応募。そして、多くの芸術家と知り合い刺激を受け、自分も何かやってみようと動き出す。

20年たった今、あの時出会った芸術家の皆さんの協力もあって、この施設を中心として、まえばしがアートの街にかわった。まえばしは、毎日が賑やかな笑顔であふれている。アートは人を笑顔にする。アートは人に自信をもたせる。この施設がまえばしアートの発信源として動き出して20年。そして今、私もひとりの「まえばしアーティスト人」となっている。

【本川委員】

事例：Aさん（40代、女性）：主婦。夫が転勤族の元市民

20年前、夫の転勤で前橋市にやって来た。たまたま通りがかった施設に入ることがきっかけでサポーターになった。親戚も友人もない見知らぬ土地で、初めて人と繋がる出会いを与えてくれたのがこの施設だった。幅広い年代の人たちと和気あいあいと楽しく活動をして、たくさんの友人ができた。その後、私は前橋を去ることになったが、当時の仲間との交流は今でも続いている。時折、展示を見に家族で訪れると「おかえりなさい」と出迎えてくれる。私にとって前橋は第二の故郷だ。

事例：Bさん（30代、女性）：学芸員。20年前は中学生

当時はやりたいこともなく、将来の夢もなかった。勉強も面白いとは思わなかったし、授業も身に入らなかった。でも、学校でこの施設に課外授業に行ったことで自分の人生が大きく変わった。学芸員という専門職があることを知り、ボランティアで仕事の手伝いをさせてもらった。学校では習わない、前橋の地域文化を保存する大切さや展示することの楽しさを知った。もっと学びたいという気持ちが夢となって、私は学芸員になった。

【渡邊委員】

事例：20年後の芸術文化のふれあいの拠点

20年後には、子供から大人まで楽しめる施設として、郷土ゆかりの作品展を行い昔の周辺市街地で活躍していた、アーティストの作品も展示していた。

今回は、歴史ある収蔵作品から、質・量ともに充実した作品の中から、郷土作家の秀作を50点展示して、足跡をたどるとともに、前橋の郷土・伝統に培われた作品が紹介され、世代を超えた市民が訪れている。

（50音順）

資 料 編

前橋市芸術文化施設運営検討委員会設置要綱

(設置)

第1条 本市が整備工事中の芸術文化施設について、利用者の視点に立ち、市民に親しまれる施設のあり方を検討するため、芸術文化施設運営検討委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会は、市長の求めに応じ、芸術文化施設のあり方について必要な事項を検討し、市長に提言を行うものとする。

(組織)

第3条 委員会は、委員14人以内で組織する。

2 委員は、次に掲げる者のうちから市長が委嘱する。

- (1) 市文化協会関係者
- (2) 教育関係者
- (3) まちづくり関係者
- (4) 舞台関係者
- (5) 美術・デザイン関係者
- (6) 公募の市民

(任期)

第4条 委員の任期は、委嘱の日から第2条の規定による提言を行う日までとする。ただし、市長が必要と認めるときは、その期間を延長することができる。

(委員長及び副委員長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長1人を置き、委員の互選により定める。

2 委員長は、会務を総括し、委員会を代表する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第6条 委員会の会議は、委員長が招集し、その議長となる。

2 委員会の会議は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。

3 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取等)

第7条 委員長は、必要があると認めたときは、委員会の会議に関係者の出席を求め、その意見又は説明を聴くことができる。

(報酬)

第8条 委員への報酬は、無報酬とする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、政策部文化国際課において処理する。

(その他)

第10条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この要綱は、平成24年3月27日から施行する。

「芸術文化施設運営検討委員会」 委員名簿

氏 名	性別	選出区分	備 考
委員長 中島 信之	男	美術・デザイン関係者	(株)プラニッツ (企画デザイン)
副委員長 塩崎 政江	女	教育関係者	前橋市児童文化センター館長
岡田 達郎	男	公募の市民	公募委員
金井 訓志	男	美術・デザイン関係者	美術作家
喜多村 徹雄	男	教育関係者	群馬大学教育学部准教授
坂本 敏	男	まちづくり関係者	前橋中心商店街協同組合理事
添川 秀樹	男	舞台関係者	(株)ステージサービス群馬 (ホール管理)
中台 澄之	男	美術・デザイン関係者	(株)ナカダイ前橋支店長 (廃棄物回収業・企業メセナ)
中村 ひろみ	女	舞台関係者	演劇プロデュースとろんぷ・るいゆ主宰
西林 乗宣	男	市文化協会関係者	前橋市文化協会書道部会長
野本 文幸	男	まちづくり関係者	NPO法人まやはし理事長
三友 千春	女	公募の市民	公募委員
本川 美輝	女	公募の市民	公募委員
渡邊 正義	男	市文化協会関係者	前橋市文化協会美術部会長

14名（50音順・敬称略）

